

12:20 ~ 14:30 シンポジウムⅡ

地域医療構想、地域包括ケアシステムの構築に向けた地域包括ケア病棟(床)の現状と課題

1. 3つの病院機能から見た地域包括ケア病棟(床)

(3) 地域密着型病院から

志田病院 理事長

志田知之

『当院の地域包括ケア病棟の現状と今後の展望』

当院は52床と小規模の元来療養病床のみの病院で、現在はその内12床を地域包括ケア病床として運用している。当院は外来診療を比較的多く担うとともに、古くから訪問診療に積極的に取り組む「在宅療養支援病院」であり、いわゆる「地域密着型病院」として地域に根ざした活動をしている。当院のある佐賀南部医療圏は以前から病床過剰地域であるため、この20年間ほぼ増床ができない制約の中で、少ない病床の有効活用を常に考え運営してきた。病床種別の小変更を繰り返して現在に至るが、当院にとっての大きな変革の一つは、平成19年に回復期リハビリテーション病棟を開設したことである。以降、リハビリテーション機能は当院の大きな役割の一つとなっている。

平成26年に地域包括ケア病棟(床)が創設されたが、「在宅療養支援病院」、「地域密着型病院」である当院が取り入れるのに相応しい形態であると直感し、人員配置とデータ提出加算の要件クリアの対処を速やかに実行し、平成27年1月から地域包括ケア病床をまず8床で導入することができた。当院の地域包括ケア病床の特徴は、サブアキュート症例が約7割を占めていることであり、「地域密着型病院」であることの証左であると思われる。入院期間は短縮し回転率が上がり業務量は増加しているが、今年4月の診療報酬改定においても在宅からの入院は更に評価されることとなり、地域包括ケア病床は当院にとって使い勝手の良い病床であるとますます実感している。

地域医療構想時代の現在、予想だにしなかった増床のチャンスが昨年の夏、突如巡って来た。当院から100m程の位置にある療養病院(44床)が閉院の方針を決められ、最終的に当院への事業譲渡が決定した(8月末に合意)。昨年10月末に事業譲渡の手続きが完了し、12月末に同院を一旦閉院。現在、当院本館に連結した新病棟の建設に着手しており、来年初めの竣工後、当院は80床(回復期リハ病棟32床、地域包括ケア病床28床、療養病床20床)に増床の予定である。地域医療構想は、ややもすると病床削減のための我々にとってネガティブな政策のように語られることがあるが、昨年後半から自らが地域医療構想調整会議の俎上に載せられることとなってみて、地域医療の一端を担う我々のような非力な民間病院にとって、調整会議がお互いの医療機能や連携のあり方を率直に語り合える場として大変有意義であり、当事者にとって非常に有難いものであると感じた。佐賀県の地域医療構想は、行政の担当官が非常に有能かつ熱心であることがその成功の大きな要因となっており、基本的に建設的な良い方向に議論が進んでいると感じている。

当院は現在、来年の増床に向けての準備を急ピッチで進めている。今後は地域へ当院の機能、役割についての理解を深める活動を更に積極的に行い、「地域密着型病院」としての前進を続けていきたいと考えている。